

患者調査

I 調査対象者の「付添」のついていた比率と属性

1 付添のついていた比率

調査方法の項でも記したとおり、患者調査では、すべてが付添がついていた患者を対象にしたわけではない。付添がついていた患者（以下「付添ありの患者」）、付添がついていない患者（以下「付添なしの患者」）が、おおむね半数ずつになるよう有意に各調査協力病院に依頼したため、総有効回収票1284票のうち、「付添ありの患者」511票（39.8%）、「付添なしの患者」594票（46.3%）、無回答・不明179票（13.9%）であった。

2 年 齢

20歳代から50歳代までの各層は、だいたい平均して15%前後であったが、中でも「50～59歳」が20.7%と最も多いものの、全体の平均年齢は48.3歳であった<表1>。

表1 調査対象者の年齢

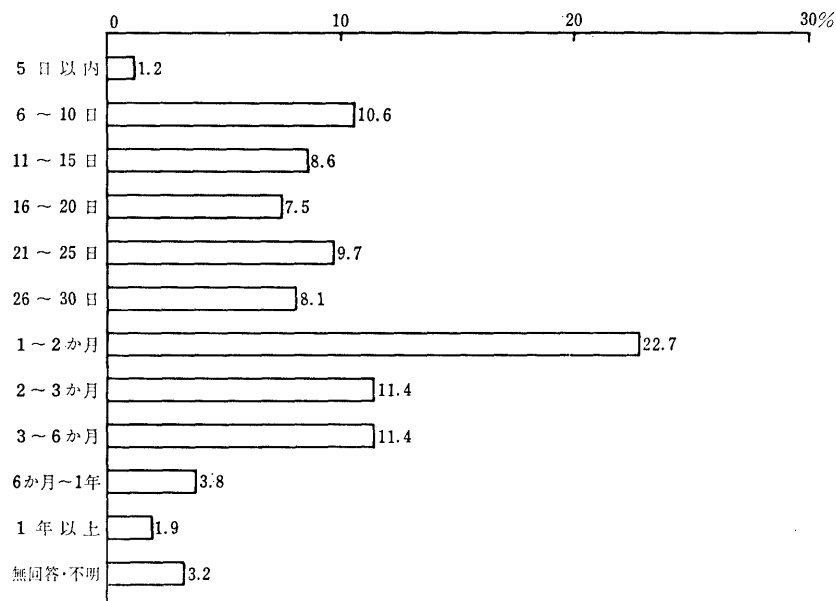
年 齢	実 数 (%)	そのうち付添のついていた患者数
15～19歳	45 (3.5)	18
20～29	175 (13.6)	46
30～39	201 (15.7)	69
40～49	230 (17.9)	89
50～59	266 (20.7)	114
60～69	188 (14.6)	78
70歳以上	151 (11.8)	86
無回答・不明	28 (2.2)	11
計	1284 (100.0)	511

表2 性 別

性	実 数 (%)	そのうち付添のついていた患者数
男	610 (47.5)	240
女	574 (44.7)	226
無回答・不明	100 (7.8)	45
計	1284 (100.0)	511

図1 調査対象者の入院日数

(100.0%)



3 性別

〈表2〉のとおり、男女ほぼ同じ割合であった。

4 入院日数

「1か月～2か月未満」が全体の約1/4弱で最も多く、平均入院日数は62.2日であった〈図1〉。わが国の平均在院日数37日注）と比較すると25日程長かった。また、「付添ありの患者」だけをみると、平均入院日数はさらに長くなり、76.6日であった。

5 入院した診療科

大きく内科系診療科、外科系診療科、その他の3つに分類してみると、外科系に入院している患者が多かった〈表3〉。

6 居住地の都市度

地域によっては、家族が入院した場合には必ず誰かが患者のそばについて療養生活上の世話をするのが慣例というようなことを耳にする。本項目で、そのような地域差を確かめようとした。

表3 入院した診療科

診療科	実数 (%)	そのうち付添のついていた患者数
内科系	437 (34.0)	132
内 科	304 (23.6)	87
呼 吸 器 科	23 (1.8)	10
消 化 器 科	42 (3.3)	9
循 環 器 科	41 (3.2)	14
神 経 内 科	27 (2.1)	12
外科系	745 (58.1)	335
外 科	234 (18.2)	129
整 形 外 科	164 (12.8)	56
形 成 外 科	9 (0.7)	1
脳 外 科	42 (3.3)	27
婦 人 科	159 (12.4)	45
眼 科	40 (3.1)	34
耳 鼻 科	36 (2.8)	9
皮 膚 科	14 (1.1)	5
泌 尿 器 科	47 (3.7)	29
そ の 他 の 科	40 (3.1)	17
無 回 答・不 明	62 (4.8)	27
計	1284 (100.0)	511

地域の概念を、都市から郡部まで都市化されている程度に4段階に分類（以下都市度という）した。都市度別の調査対象者数は〈表4〉のとおりであった。

II 患者からみた付添看護の現状

ここでは「付添ありの患者」の現状を把握する。

1 主な付添者

主に誰が付添ったか（以下「付添者」）を基準看護病院、普通看護病院別にみると〈図2〉のとおりであった。

基準看護病院では、家族付添が最も多く、付添婦のついた患者は、7.4%と少なかった。これに対し、普通看護病院をみると半数以上が付添婦であり、

家族付添よりも多かった。患者調査でも普通看護病院で、多くの付添婦がついていることがわかる。

施設調査・家族調査も同様な傾向がみられるが、このことは、普通看護病院では付添が認められていて、患者家族側も病院側に気がねなく付添婦を雇用できること、雇用した場合、健康保険から付添看護料の現金還付を受けられる等の要因が影響していると思われる。

また、これと患者の居住地の都市度との関係